

岐阜の博物館

▽ 501-32 関市小屋名
(百年公園内)
岐阜県博物館内
岐阜県博物館協会
TEL (05752) 8-3111 (代)
振替 名古屋 6 37909



歴史民俗資料館づくりに思うこと／

最近各地に、市町村立歴史民俗資料館が整備されてきました。計画中の市町村も数多くあると聞いています。これらの施設は、国の補助を受け、展示室・研究室などが整い、いつでも「もの」を通して学ぶ場となっています。

ある町で、それまで収集してきた土器・民俗用具などを生かすために資料館をつくろうと議会にまで取り上げられました。そこで担当者が資料館の構想を練りはじめたのです。すぐに壁につき当りました。予算もないのですが、資料館が町の人々にとって本当に生きて働く学習の場になるのだろうかという疑問です。

彼は、各市町村の歴史民俗資料館・郷土館を調べ、見学にも行きました。確かにすばらしい館もありました。展示物のすばらしさに圧倒される館もありました。しかし多くの館は、よく似た展示内容です。管理のための職員がいるか、来館者がある場合のみ開館する館もあるようです。「来館者がいないような資料館をつくってもかっこいい倉庫と同じではないか。図書館のようにみんなが利用できる施設で、しかも、この町にしかない資料が展示され、はじめてこの町の資料館になるはずだ。」「博物館としての機能を持たせるために、専門の担当者を置きたいね。展示をとり換えたり、企画展を開催したり、学校の児童・生徒も活用できるようにしたい。」

彼は図書館と併設させることを望みました。こうすれば管理する職員は少なくてすみ、資料

館担当職員を置けるはずで。光熱費まで少なくなるはずで。図書館へ来館される人も資料館を利用しやすいし、共通する図書収蔵資料もあるはずで。多くの人が資料館を利用できるのです。

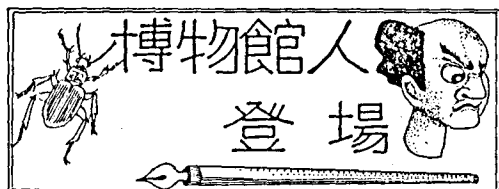
現実には、そんなに簡単ではありません。分離独立して建築する方向です。彼の考えが夢で終わらないよう、安易な資料館づくりをしないよう望みたいものです。資料は、人によって生かされて、はじめて価値がでてくるものです。

最近の歴史民俗資料館建設ブームを否定するつもりはありません。むしろ歓迎すべきことです。けれども“入れ物”は完成した。あとは管理だけでは困ります。この種の文化施設は、運営のためにお金がかかることを承知しておいていただきたいのです。専門職員の配置・資料収集費・研究調査費・展示委託費など運営に関する費用です。「もの」を生かす人と「人」を生かす環境が、生きた資料館をつくるのです。

この種の施設をつくる時、第1に、館の方向づけを明確にすることです。資料が収集してあるから展示するだけでは本来の姿ではありません。収集資料の何を、どのような目的で展示するのか、市町村の人々にどのように還元していくのか、地域と密につながった資料館づくりを望みたいものです。

資料館が完成した時がまさに出発点です。終点であってはならないのです。方向づけのできている資料館なら、受け入れ資料は限定されてきますし、その方向で地域の人々の協力も得られるはずで。

(S.A)



岐阜市歴史博物館

しろ みず ただし
白水 正氏

—博物館像をみつめる—

昨秋、岐阜市歴史博物館がオープンしました。特別展も好評、順調なスタートを切ったところで、学芸係長の白水正氏を訪れました。

歴博は開館から半年足らずで、その意味ではまだ発展途上館といえるかも知れませんが、今後の活躍が大いに期待されています。

「昭和45年から岐阜市の社会教育課にいて、文化係を担当していました。47年頃から博物館建設の動きがみえ始めて、私がおその担当になりました。」

博物館建設の準備段階から今日まで来ているのはお二人で、その内の一人が白水氏です。学生時代は東洋史を専攻され、また美術史サークルにも所属するなど、美術工芸品に親しまれてきました。現在も、特に幕末の文人絵画を熱心に研究されています。

とにかく、開館までは無我夢中。毎夜遅くまで準備室で作業するという生活の連続で、今、ようやく一息つかれたところです。

「今はホッとしています。しかし現状をみると、システムの確立不足、館蔵資料の整理の統一がとれていないなど、軌道にのっていないことがよくわかります。」

館長以下15名のスタッフを中心として、庶務係、学芸係、普及係の3つのセクションから構成されていますが、まだまだ試行錯誤の段階のようです。

冷静な目で現状を見直され、更に将来の方向についてもじっくりと語られました。

「うまくは言えないのですが、博物館らしい博物館を目指します。モノを展示するにあたっ



ては解説文を加えてただわかり易く展示するというよりも、モノそのものをみせることを考えています。解説も確かに必要ですが、江戸時代の火消し道具を見て江戸時代の歴史がわかるものではありません。歴史を学ぶのなら本を読む方が早い。だから古代のモノを見て古代を学ぶ。そのような理念で展示をしています。」

その実践として、パネル、年表類は、極力、展示ケースの外に出してあります。また複製品の展示も基本的には考えておられず、たとえば信長を語るのに信長関係の資料が絶対的に必要なのではなく、複製を展示するのであれば、信長と同時代のモノを展示するというお考えです。理想と現実とのくい違いに苦戦されながらも、さまざまな試みをされています。

館では若手の学芸職員の方々も中心となって活動をしておられます。学芸係は8名で、更に考古、歴史、美術、民俗の担当に分かれています。

「若い人は私たちと発想が違います。それぞれに個性を伸ばして活躍してもらいたいと思います。研究職で終わるのではなく、実務もこなし、現場にも出ることが大切です。」

第三世代の博物館像が検討されてきています。時代と共に価値観は変化し、当然、博物館機能も見直されなければなりません。それに対応してゆくには、博物館人の育成と職制の確立が肝要です。

“博物館らしい博物館を目指す”という言葉には、博物館界が抱えるさまざまな問題が含まれているように思います。今後の示唆に富んだお話を伺い、身が引き締まりました。(M.O)

第2回岐博協会員研修報告

学芸活動にかかわる諸自作の技術や問題点について

(展示ラベル・解説パネル・図表・スライド等)

会員研修運営委員会

第2回の岐博協会員研修会が、12月16日(月)に、岐阜県博物館で開催されました。下呂以北は、雪で真白になるという厳しい自然条件にもかかわらず、飛騨地区からも4名の方が参加され、総出席者は20名を数える盛会となりました。

今回の研修は、学芸活動のなかでもとりわけ展示・教育普及活動に必要な技術・テクニックについて、すぐ役立てることができるようなものをとのねらいから、次のようなメニューとなりました。

①学芸活動と学芸職員；基本的な構えについて

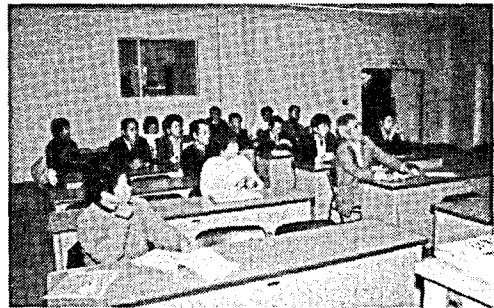
②パネル・図表製作上の諸技術、用具・作図上の留意点 明和工房 一仏氏

③岐阜県博物館での実際例

- ・パネルの解説文章、文字をどのように描いているか
- ・切り絵、切り文字の技法
- ・写真によるタイトル文字づくり
- ・自作スライドの事例

講師として、明和工房の一仏氏をお招きしてプロの技・プロの用具を紹介していただきました。参加者一同、その技に驚嘆すると共にパネル作りのツボを会得できたのではないかと思います。専門家の使う道具・材料も興味のそそられるところであり、いわば ④事項なのかもしれ

ませんが、一仏氏は快くその点についても教えて下さいました。あとは、私達の努力次第で素晴らしい展示解説パネルができるのではないのでしょうか。



(一仏氏の話真剣に聞く参加者)

岐阜県博物館では折しも、手作りの資料紹介展「ふるさとの魚」を開幕し、また自然展示室2の整備充実の工事がほぼ完成した時でした。そこで、手づくりのパネル、解説文字、図、看板等を見ていただきました。上手・下手ではなく、時間をかけていねいを書くことが、読みやすいことの第一であることを再確認しました。

文字については、本紙№67、P5に、小野木三郎氏の実践報告がありますので参考にしてください。図表づくり等に用いる絵具・筆等については大野栄進堂(岐阜市市民病院南)を紹介していただきました。直接相談に行かれるとよいでしょう。

第3回岐博協会員研修会の案内

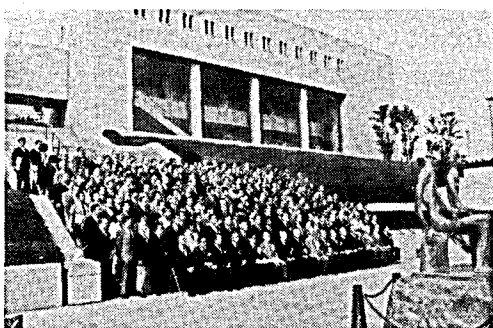
- 1.期日 昭和61年3月16日(日)～17日(月)
- 2.会場 恵那簡易保険保養センター(恵那峡)
〒509-72 恵那市大井町奥戸 2709
TEL 05732-6-4600
- 3.参加費 1人 6,000円
- 4.日程 16日(日) 午後5時 現地集合・受付
5:15～6:30「東海の博物館事情～問題点～」
話題提供；半原版画館長：名古屋大学
理学部・糸魚川淳二先生～質疑討論～
7:00～ 夕食(懇親会) — 自由集会 —

17日(月) 8:00～8:30 朝食
9:00～11:00 博物館諸刊行物の企画・実務、
自作上の問題点について

- ◎ポスター、チラシ、見学の手引き、解説書等の諸資料を、各20部見当で持参ください。
- ◎参加申込みは、電話 or 葉書にて、2月28日までに下記へお願いします。
〒501-32 関市小屋名岐阜県博物館学芸部
小野木三郎 TEL 05752-8-3111 (代)

教育改革と博物館Ⅱ ～今後の方向とあり方について～

熱海MOA美術館での大会に参加して思うこと



(ムーア広場での記念撮影)

昭和60年11月5日・6日の両日にわたって、第33回 全国博物館大会が、熱海MOA美術館にて開催されました。

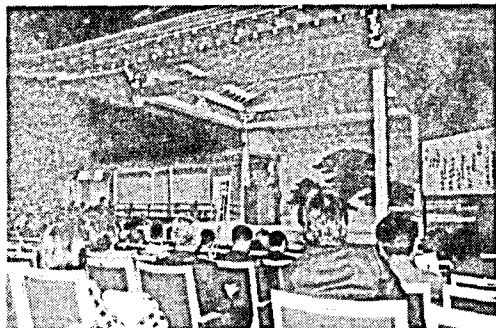
今年度は、臨教審の第一次答申をふまえ、博物館が今後の教育にどのようにかわり、実践を積み重ねていくべきかについての真剣な討議がくり広げられました。

全体でのシンポジウム、各分科会で話し合われたことがらをまとめると、次の6点になろうかと思われます。

- (1) 学校教育と博物館
- (2) 生涯教育と博物館
- (3) 教育機関としての博物館施設
- (4) 学芸員の活動と資質
- (5) 友の会・ボランティア活動・民間活力の導入
- (6) コンピューター化

熱海MOA美術館という超近代的な館を会場

(記念講演会＝能楽堂にて)



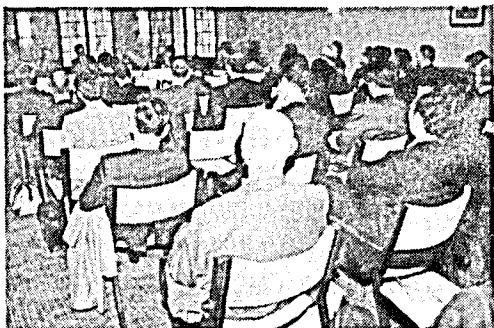
(シンポジウム)

とし、懇親会は徳川会長の米寿の祝賀会も兼ねるなど、華やかでおめでたい大会となりました。しかし最後の全体会議まで残り、決議採択まで参加したのは、300人中50人程度といったあたり、「お祭りでしかないのかな?」「博物館の諸問題は、いきつくところ、人の問題だな」などと考えてしまいました。

最後に閉会の挨拶で、徳川会長が「あせらずねばり強く活動を続けましょう。来年は、九州でまた会いましょう。私も必ず参ります。」と言われたことで、何か心が洗われたような、印象に残るひとときとなりました。

博物館全体が、社会的に認められ評価されていないなかで、学芸員が専門職として命がけて働ける日は、まだまだ遠いと感じつつも、「やらねば、今、博物館に務める者がやらねば、誰がやる」といったヤル気・勇気を奮い起こさせてくれた大会ではありました。(M. I)

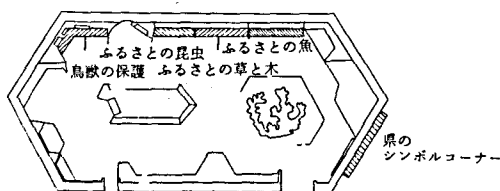
(第2分科会＝私立館園)



岐阜県博物館 自然展示室2 展示整備充実工事が完了

実物資料が数多く並びました。どうぞ おいで下さい。

岐阜県博物館は、開館10周年を迎えます。
この間、県民の方々の協力、学芸員の努力により数多くの資料が集まりました。そこで、県のシンボルコーナーをはじめ、展示資料の整備充実をはかりました。

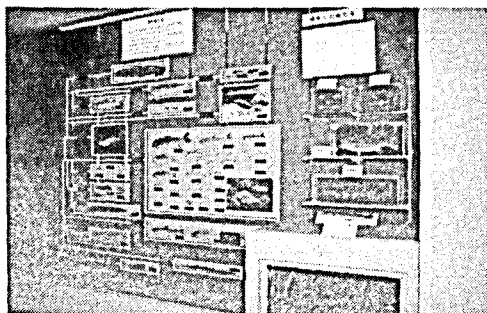


自然展示室2 ▨ = 整備充実コーナー



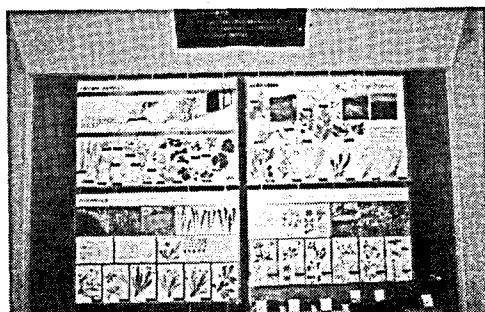
☆県のシンボルコーナー☆

- 県の木＝イチイ（木幹標本・一位一刀彫）
- 県の鳥＝ライチョウ（ハク製標本・巣・卵）
- 県の花＝レンゲ（レプリカ・ミツバチ）



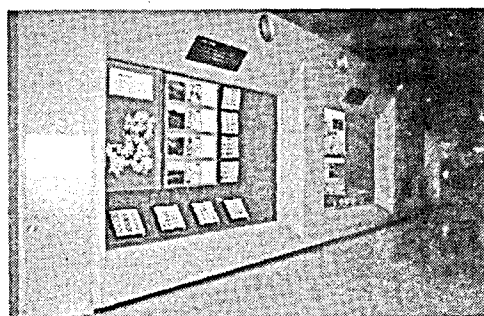
☆ふるさとの魚☆

- 県内産の魚のハク製標本・写真パネル
- 燐化した魚の液浸標本
- 水槽＝生きた魚が泳いでいます。



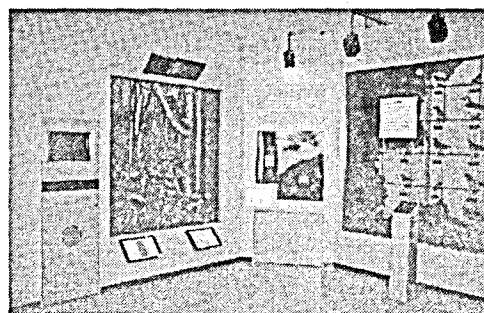
☆ふるさとの草や木☆

- 人里の植物 ◦ 山を登る人里植物
 - タンポポのふしぎ ◦ スミレを知っていますか
- （レプリカ6点）



☆ふるさとの昆虫☆

- 昆虫の系統図 県内産昆虫地図
- 高山・森林・草原・人里に生息するチョウ
- 昆虫テーマ展示（定期的展示替え）

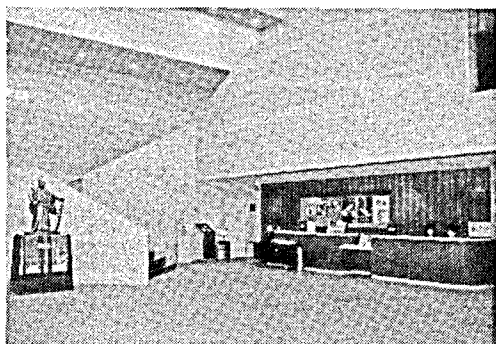


☆鳥獣の保護☆

- ふるさとの野鳥 ◦ 鳥の役割
- 野生動物の保護（キツネ・テン・ノウサギ）
- ビデオ（ふるさとの鳥・アライグマ）



噴水と正面入口



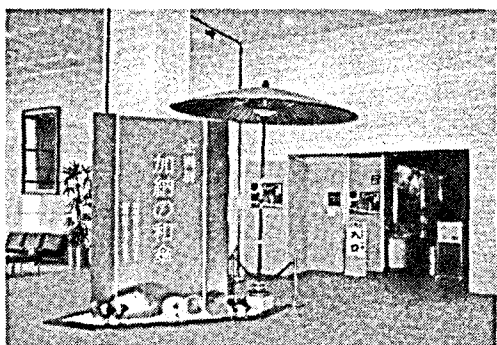
受付ホール



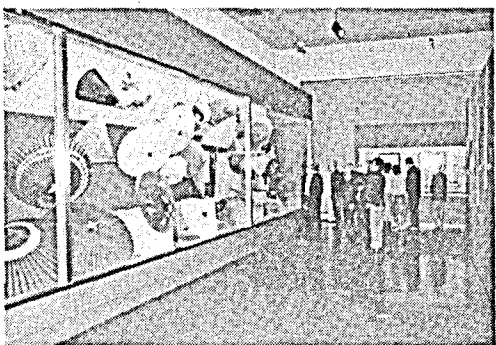
休憩ラウンジ



ホールの美濃国絵図



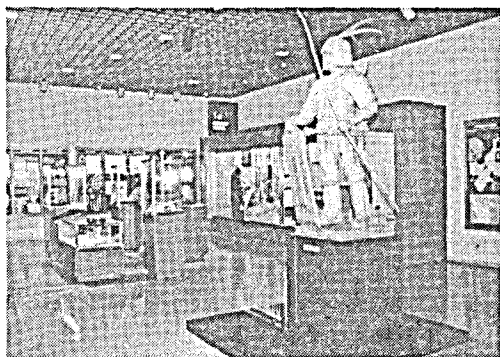
企画展入口



企画展「加納の和傘」展示会場



ジャンボ和傘



常設展「原始」のコーナー



「古代」のコーナー



「近世」のコーナー



「近世—かさとちょうちん」のコーナー



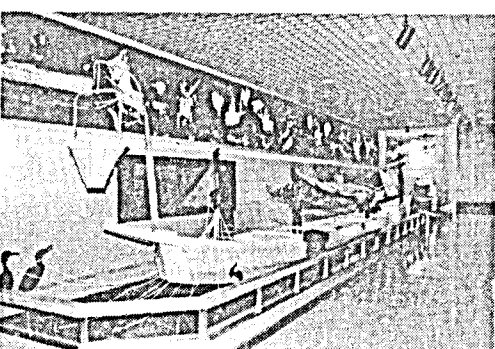
学習室「歴史クイズ」コーナー



ビデオ・コーナー



「長良川の鵜飼」コーナー



鵜舟のコーナー

増築、新装開館、中津川市立青邨記念館



(左側が、増築された展示室)

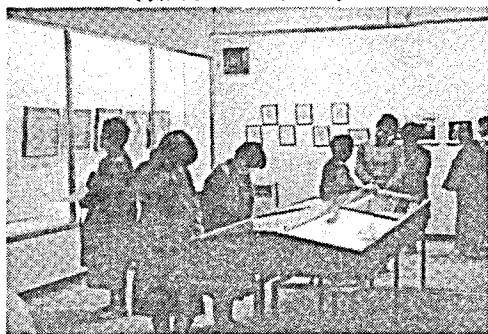
青邨記念館は、昭和41年に画伯の偉業と功績を永く伝えるために開館され、下図を中心に、玄人にも喜ばれる専門美術館として活動を続け、高い評価を得てきました。

このたび、生誕百年記念展を開催するにあたり、館の増築がなされ、床面積は約2倍の242㎡になりました。展示室が広くなり、収蔵保管のスペースも確保されました。記念展は、12月7日から15日までの短期間でしたが、3,500名の入館者を数えました。とりわけ今回の記念特別展では「三浦大介」の本人と下図とを並べて観ることができたり、画伯の人柄を示す手紙やハガキ、大観・靑彦といった画家からの手紙も紹介されるなど、青邨の人と芸術とを示す素晴らしい企画でした。これを機に、地元で人知れず眠っていた、画伯の若かりし頃の作品が発見され、(絵馬や天井画など)大きな収穫となりました。美術館がそこに存在し、作品を展示するだけでなく、地域文化の発展、歴史の掘りおこしに成功した格好の例といえます。

また、中津川市をあげての記念事業の一環として、「青邨遺珠」(原色版六号紙仕立複製五葉・解説付)が発刊されたのも、生誕記念展に華をそえました。こうした素晴らしい事業・特別展の企画・実施のカゲには、青邨を愛し誇りに思う中津川の人々の力が、大きく働いたに違いありません。青邨記念館の職員の方々の努力と汗の賜物ともいえます。ぜひ増築・新装なっ

た青邨記念館を訪れて下さい。渡辺美津子さんという素敵な方との出会いがあり、興味つきない解説がきかれるはずです。(M.I)

(館内の様子)



金生山化石館 新装オープン

昨年11月3日から、金生山神社境内に新しい化石館が誕生しました。これまでのものが老朽化したため、赤坂商工会が、事業費4,500万円、鉄筋二階建て延べ263㎡で建築したもの。一階は、専門的な資料を展示、二階には、赤坂の海の立体模型があり、赤坂の化石のわかりやすい展示、大理石の工芸品、地元の特産品の展示コーナーなどがあります。

編集後記

◎本号は、盛りだくさん内容となりました。博物館の目、全国大会の報告記等でも指摘されているように、博物館が生きるのも死ぬのも、つまるところは、建物でも、ものでもなく、やはり「ひと」であるだけに、会員研修会のスタートは喜ばしいし、博物館人の社会的責務は絶大です。(S.O)

◎「学芸員が専門職として命がけて働ける日は……今、博物館に務めている者がやらねば……」に奮い起こされて、どうかひとりでも多くの博物館関係者の方々の参加をお願いします。P3で案内の会員研修会、東濃路でお会いしましょう。(M.I)

◎理論と実践の博物館人、名大の糸魚川淳二先生と、一夜じっくり語り合ひましょう。(S.A)